

退職にあたって

石橋 孝治

昭和 60 年 4 月に佐賀大学（理工学部土木工学科）に着任して 32 年が経ちました。前任地は栃木県の足利市にある私立の足利工業大学（土木工学科）で 5 年間勤めていました。大学院終了後すぐに足利工業大学に赴任しましたので、この間は大学教員としての振る舞いを身に着ける期間、云わば OJT であったように思われます。色々なことを学ばせていただき有り難く思っています。足利市は場所的に東京に近いことから、この間に学会の委員会活動等を通じて多くの皆様との面識を得る機会を得ることが出来ました。この人脈は今日に至るまでも続いており、佐賀大学に在職中も活かしました。

佐賀大学理工学部土木工学科が土木材料施工学講座の助教授を公募していました。これに応募し、昭和 59 年の？月に面接のために土木工学科を訪れました。面接者は高田先生と井前先生でした。「岩盤工学とトンネル工学を専門としているが土木材料学と土木施工学の教授は大丈夫ですか？」と念を押して聞かれました。コンクリート材料は学部 4 年生の時に鍛えられましたし、トンネル掘削は土木施工の代表例みたいなものですので、「大丈夫です。頑張ります。」と答えました。上司である石川先生から後から聞いた話ですが、お二人の先生の印象は“線が細い”と感じられたようです。結果は“採用”と言うことになりましたが、荒牧先生の

後日談では「お二人の先生の話と違うキャラクターだね。」とのことでした。猫を



被っていた訳ではありませんが、ある種の緊張下での振る舞いが“元気が無い”ように見えたのかも知れません。

昭和 60 年 4 月から卒研生のお世話をすることになりますが、新設された建設工学科の第一期生が 4 年生になる時期と重なりました。新参者ですので新 4 年生も私の研究室を選ぶのは勇気のいる決断だったと思います。国立だから優秀な 4 年生と卒業研究を一緒にできると多いに期待しておりましたが、新参者の常で取得単位数が少し不足する学生さんが集まりました。リスクを抱えた学生が新参者のリスクのある先生の研究室を選んだということで、痛み分けということでしょうが、研究室の第一期生の心意気に感謝いたします。

在職中、年度を跨ぎオーストラリアに研究留学したことから、2 年間卒業生のお世話をしていません。したがって正味 30 回分しか卒業研究をしていないことになり、他の先生方と比べ少ないかも知

れませんが、多くの科目を担当しました。私としては皆さんに“義理と人情と浪花節”を旨として対応してきたつもりですが、そうでない方がおられましたらお許し願えればと思います。

着任時には石川、荒牧両先生のご尽力で概算要求による大型構造物の実験施設が整備されることに決まっておりました。疲労試験機が導入されるということで、施設整備の内容の最終打ち合わせに加えていただき、地下ピット方式が採用されたことが非常に嬉しかったことを覚えています。また、本学施設課の担当者の皆様には大変良くしていただき、立派な施設が完成しました。この施設は退職するまで利用させていただきました。

建設系学科では三浦先生が“軟弱地盤”の分野をけん引され精力的に活動されていきました。ここで初めて佐賀平野の軟弱地盤問題を認識しました。私は固化した地盤（岩盤）を対象としたため、周辺のトンネルとダム基礎の岩盤とコンクリート施工に研究の地域貢献対象を絞り模索を続けました。長崎自動車道は開通しておりました。嬉野トンネル他の膨張性地山の変状くらいで、また脊振山系は良好な花崗岩の岩盤でトンネルに関しては、佐賀は魅力的な地域とはなり得ませんでした。ただ、佐賀県の横竹ダムのリムトンネル工事の分岐部で天端崩落がおき、その調査の相談があった時は失礼ながら少しワクワクしました。

嘉瀬川ダムも調査設計が終わっており、基礎岩盤の岩盤試験に関与することはありませんでした。ただ、佐賀県が担当する付け替え道路での古湯トンネルに関しては関与させていただき、水を得た気持

ちになりました。

結果的には、コンクリート材料に係わる施工分野での地域貢献に落ちてしまいました。マスコンクリートの温度ひび割れや乾燥収縮ひび割れ、設計不良による曲げひび割れ等に係わる事柄で、面接で確認された土木施工のコンクリート工と言うことになります。木材料施工学講座にはまったということで、高田先生と井前先生の人材の目論見どおりと言うことになりました。

岩盤工学とコンクリート材料で共通するのは骨材資源となる岩石ということになります。この関係で県内の採石業の皆様には、採石現場での試験（根付き試験片を用いた原位置疑似三軸圧縮試験、AE法に寄る岩盤内初期応力推定）で大変お世話になりました。また、佐賀県の廃トンネルも利用させていただき本来の岩盤分野の研究をしっかりとさせていただきました。

退職間際の佐賀県ダム総合点検委員会ではコンクリートと岩盤問題が重複するものでやっと集大成に辿り着きました。

退職3年半前に工学系研究科長（理工学部長）を拝命しました。この間は、都市工学科・専攻の運営に関与できない立場となりました。学科の皆様は授業や委員等の負担増をおかけすることとなり、申し訳なく思っております。大学運営における人件費削減の方針により、私のポストは不補充と言うことになりました。今後益々学科・専攻の運営が難しくなりますが、この分野は今後とも絶対に必要な分野です。都市工学科・専攻の発展と地域貢献を祈念してむすびます。